

明るい社会とは

西条市立西条北中学校 3年 村上友梨

私はこの作文を書くにあたって「明るい社会」とは何かを考えた。

ニュースで報じられる犯罪を聞くと、誰だって恐怖を覚えるだろう。確かに犯罪を行うのは許されない行為だ。ただ、ニュースで報じられるのはその事件の側面だけであり、被害者、加害者それぞれの思いや、事件が起こる事となった背景を詳しく知る事はできない。誤解だつてうまれる。それによって苦しむ人もいる。だからこそ私たちは、加害者も私たちと同じ人間であり、一人一人が感情を持っているということを忘れてはならないのだ。では、罪を犯した人が社会に戻ってきた時、この社会はどうあるべきなのだろうか。

今現在の日本の再犯率は50%を超えており、その理由のほとんどが、刑務所から出た後に仕事や家が見つからないなど社会的に排除され孤立してしまい、更生意欲をなくしてしまったからだという。これは罪を犯した人だけが悪いのだろうか。私はそうではないと考える。再犯の大きな理由は社会の在り方ではないだろうか。再犯率50%以上という事実は私たちが、この社会が、犯罪者をうんでしまっているということではないのだろうか。例えば就職。就職希望者が過去に罪を犯したという理由だけで採用しないなど、外面だけを見て本当のその人を知ろうとせず、「犯罪者」と一括りにして排除するという事例がたくさんあるのだ。罪を犯した人を恐れる気持ちは分かる。私だつて目の前に罪を犯した人が立っていたら怖いと思ってしまうだろう。しかし、そこで一歩歩みよる。その人を知ろうとする。会話をする。この行動こそが罪を犯した人の心を救い、再犯をうまないことにつながるのだと思う。

日本には「保護司」と呼ばれる方が全国に約4万7千人おり、罪を犯した人の社会復帰を援助する活動を行なっている。就職先や住居を手配したり、心のケアをしたりするなど、その人に寄り添い、地域と協力して活動する姿は私たちに「人を想い、助け合う」という大切なことに改めて気付かせてくれる。考えてみてほしい。「罪を犯した人が隣の家に移ってきた。」「罪を犯した人の就職先を探してほしい。」あなたは思うか。快く「よろしく願います。」「もちろん、いいですよ。」と言えるだろうか。この問い掛けにみんなが自信を持って「言える」と答えられる社会。それが誰にとっても生きやすい『明るい社会』だと私は考える。私たちがそんな社会をつくっていかなければならないのだ。『明るい社会』をつくっていくためにまず私たちができることは、一人一人が気付かないうちに抱いてしまっている「前科者は怖い、関わらない方がいい。」という思い込みや偏見をなくしていくことだ。思い込みや偏見が差別をうむ。誰かが住みづらい、生きづらい社会をつくる。だから、私自身も日常生活の中でこれは勝手な偏見なのではないかと考え、行動していきたいと思う。

また、地域や社会の雰囲気づくりも大切にしていきたい。雰囲気には自然と人を変える力がある。地域全体がみんなを平等に一人の人間として接する。差別を許さない。そんな雰囲気を持っていれば自然とそれが社会全体にも広がっていくのではないだろうか。

私はこれまで「社会を明るくする運動」という言葉を何度か聞いたことはあっても、どうしても他人事だと思ってしまっていた。しかし、今回この作文を書くにあたっていろいろな事を調べるうちに日本社会の現状を知り、自分事として捉えて、自分にできることが大切だと思った。「社会を明るくする運動」それは、誰もが住みやすく、生きやすい社会を社会全体でつくっていく運動。これからは、“誰かが”という意識を捨て自分から変わっていく、そんな自分になりたい。